

日本最初の商社結成

あまか
天翔ける

坂本龍馬 ①

一龍斎貞花

講談師

文久2年(1862)夏、土佐を脱藩した坂本龍馬は江戸に到着。脱藩者とあって土佐藩の屋敷には入れず、以前江戸で遊学中剣道修行をした千葉道場に世話になり、志士たちと行動しておりましたが、各方面に顔の広い道場主千葉重太郎(じゅう)の紹介により、幕府の政事総裁松平春嶽(しゅんがく)という大物に面会。春嶽も龍馬の人柄を見込んでか、大久保一翁(いちおう)(幕府調所頭取)などを紹介。

10月のこと、尊王攘夷の意気高らかな龍馬は、「幕臣の勝海舟が開国論を唱え、尊攘派を敵視している。許せん男だ。春嶽公に書いてもらった紹介状がある。海舟に面会しことによったら斬ってしまおう。」「そういうことなら俺も一緒に行って助勢してやろう」と、千葉重太郎も同行。当時開明派の海舟の命を狙う者多く、尊攘派のみならず幕臣の中にも海舟の言動

を苦々しく思っているものも少なくありませんでした。

幕府の軍艦奉行並(なみ)という職にあり、赤坂氷川神社裏手の崖下に住む海舟の屋敷を訪れたのは真夜中に近かった。

名刺を出して面会を求めるや、ひょいと出てきたのが、なんと海舟本人、2人を見るや、

「貴公ら、わしを斬りに来たんだろう、斬るのもいいがその前にわしの話聞くのもよかろう」丸腰のまま平然と背中を見せスタスタと奥へ。もうこれだけで龍馬は吞まれてしまった。自分を斬りに来た初対面の者にこの態度。

「オイッ」思わず顔見わせる2人。海舟この時40歳、2年前咸臨丸渡米、海外の情勢を視察しているんです。

世界の情勢を語り、「日本は海にかこまれ、外国の船はどこからでも侵入可能だ、海防が重要、今アメリカやエゲレスと戦って勝てるはずがない、攘夷などおろかなこった。幕府の役人の中にもわからぬ輩(やから)がいる。尊王だ、攘夷だなどと馬鹿げている、海軍を創設し海外と交易をしなくてはいかん!

龍馬は、聴いているうちに、春嶽の紹介状を出すもなにもない、海舟の器量と識見にすっかり感服、両手をつかえるや、「ご高説を承り、恐れ入りました。何卒お許し下さい、どうか先生の門弟にして下さい。」「よろしい、日本の海軍のため働いてもらいましょう」

返答いかんによっては斬ってしまおうと乗り込んだのが、度量の大きさに感服し海舟の弟子となったのでございます。

下級武士・町人郷土坂本家

龍馬は、天保6年(1835)11月15日(14日、10日説あり)、町人郷土という下士かしの家に生まれた。江戸時代のはじめ、土佐領主となって入国した山内一豊は、旧領主長宗我部ちやうそがべの家来たちに苦しめられ、そこで自分の家来を上士じやうし、長宗我部の家来たちを下士と差別、坂本家は下士となり、身分は武士として帯刀するも俸禄、つまり給料はなし。そこで土佐の郷土たちは、商いに精を出し町人郷土。徳川家が、滅亡した武田の家臣を雇ったのが「八王子千人隊」、しかし禄はなし、そこで武士ではあるが農業を営んだんです。

坂本家は、「才谷屋さいたにや」という裕福な商家。母が龍が天に昇る夢を見て龍馬を出産。しかも背中にはたてがみのような毛が生えていたという。後年妻となったお龍は、龍馬のたてがみをいとおしげになでていたという、そんな小説もあるが、これらは龍馬が有名人になったことから創られた“龍馬伝説”でありましょう。

有名になったのは講談師のおかげ

「薩長同盟」「船中八策」など新時代移行へ活躍したものの、明治維新前に死んだため、西郷隆盛、木戸孝充などに比べ知名度が低かった。忘れられていた龍馬

が一躍有名になったのが、講談師坂崎紫欄しらんが、明治16年から“土陽新聞”に連載した龍馬主人公の「汗血千里駒かんけつ」これが大人気、背中にたてがみというのもこの小説から。講談でも血わき肉躍る一席を口演。さらに、昭憲皇太后がある日夢を見た、白装束の武士が「某それがし、維新前国のために働いた坂本龍馬と申す者、此度の大戦、魂魄この世に残りて必ず勝利に導きます」この「皇后の夢」が有名になり、ロシアのバルチック艦隊を撃破することが出来たという。これもロシアなにするものぞと思わせるために仕組まれたことであろうといわれている。

5人兄弟の末っ子で、11歳頃まで寝小便たれの泣き虫。過保護だったんでしょう。塾へ行ったが、上士の塾生とけんか。身分が違うので正しくとも下士が悪いとされ、このため塾をやめさせられ、それから間もなく母が病死。母代わりとなったのが3歳年上の姉乙女おとめ。「お仁王様」と呼ばれた大身の女丈夫がスパルタ教育。2年後日根野道場に通り始め、剣術、柔術、槍術、居合、騎射などを習いめきめき上達、19歳にして目録を授けられ、藩の許しを得て2年間江戸へ出て千葉道場へ入門。いよいよこれより新時代へ大きく飛躍しようというお話は、次号のお楽しみ、ポポンポン